

戦後京都学派の礎ここにあり

人文研セミナー 桑原武夫の世界

10月15日、京都大学人文科学研究所にて同研究所主催の連続セミナー「人文研90年みやこの学術資源の継承と発信」の第1回「桑原武夫の世界——その書簡や遺品から考える」が開催された。人文研は2015年に「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」を立ち上げ、同研究所の所蔵資料をはじめ学内外にある学術資源を発見・保管し、それらを後世に伝えるために活動している。連続セミナーは同プロジェクトの一環として開催された。

桑原武夫は1904年生まれ、福井県出身のフランス文学・文化研究学者で、京都帝国大学文学部仏文学科を卒業し、スタンダールやアランの研究を行いフランス文学の知名度を上げた。戦後には京大教授として今西錦司や梅沢忠夫など同世代・後輩の学者と広く交流し、戦後京都学派の中心的存在となった。なお、桑原は人文研の所長を務めたこともあり、人文研には桑原武夫の遺稿や書簡が多数所蔵されている。

セミナーの講師はジャーナリズム史を研究している立命館大学准教授の根津朝彦氏と福井県ふるさと文学館学芸員の岩田陽子氏が務めた。

まず登壇した根津氏は卒業論文で桑原武夫の京都学派における立ち位置に関する研究をしていた経歴を持っており、そこから桑原武夫の生涯を紹介しながら

原と京都学派の関係性の研究について話した。桑原は家族の中でも特に京大教授でもあった父・隆蔵の影響を受けていた。隆蔵が洋書を多数所有していたため武夫は小さな頃から西洋文化に触れられる環境にあったことを紹介した。京大に入学してからは、桑原はフランスに留学し、本格的にフランス文学者の道を歩み始めることとなった。京大教授に就任後、京大を中心とする学者たちとの手紙を数多く交わしており、根津氏はこうした手紙から桑原の社交性の広さがわかると述

べ、それを基礎として京都学派のネットワークが形成されていったと説明した。また、根津氏は桑原が議論によって互いを研鑽することにより研究・思考の質を高めていく学問のスタイルを奨励したと述べた。

続いて、岩田氏は主に人文研が所蔵する桑原武夫が遺したメモ・資料、桑原と作家や詩人、学者との間でやり取りされた手紙書簡から伺える桑原の人物や趣味について話した。福井県ふるさと文学館は昨年、桑原武夫没後30年を記念して関

連資料を人文研などから集めて展不没後30年「桑原武夫展」を行ったこともある。展示の際に用いた資料の中には中学時代の桑原の成績表や桑原の趣味である登山で用いられた登山具などがあつた。このほか、マンガや絵画を作っていたことがわかる資料もあり、桑原が単に文学研究者としてだけではなく、創造力豊かな人物であった一面も伺えた。また、岩田氏は三好達治や丸山薫との間で交わされた手紙から桑原の他人を気遣う性格が見られたと述べた。

両氏の講演後は、聴講者と根津氏・岩田氏との質疑応答に入った。質疑応答では、桑原武夫関連の資料の行方に関する質問や桑原が設立に関わった国際日本文学化研究センターに関する質問などが聴講者から行われた。